

招待講演Ⅱ

三宅 秀とその周辺

佐々木 恭之助

三宅 秀 外曾孫、東北電力(株)常務取締役・福島支店長

東京大学初代医学部長、医学博士第一号、東京帝國大學初の名譽教授と初物づくしの栄譽を担った三宅 秀については、これまで多くの方の評伝があり、医学者としての活動についても数多くの論文が発表されていると承知する。中でも、日本医史学会常任理事で、今次日本医史学会総会において招待講演の座長を務められる酒井シヅ先生は、秀の外曾孫の一人が編者となった「桔梗—三宅秀とその周辺」という私家本に「良斎と秀」と題して、誠に意を尽くしたご懇篤な論文をご寄稿頂いた。今次総会で会長招待講演をさせて頂くこととなった私は、秀の四女の孫であるので、外曾孫の一人ということとなる。もとより、医学とは無縁の私のような者が、これらの優れた論考に加えるべきものは何もないが、秀の少年期から青年期にかけての歴史背景、社会環境や師友らとの交流に焦点を合わせ、秀の活動の原点を身内から見つめ、お話しすることは、それなりに意味あることではないか、そして先祖のことを多くの方々に知って頂く、またとない機会ではないか、と考え、今回の招待講演をお引き受けした次第である。

秀は十五歳の若さで第二回文久遣欧使節団に参加し、七ヶ月にわたり、アジア諸国やエジプト、マルセイユ、パリなどヨーロッパの諸都市を見聞することを得たが、この時期は明治維新を五年後に控え、国内は勤王だ佐幕だと大層物騒だった。が、渦中の地域や人物を除けば、進取の気性に富んだ人材にとっては誠に面白く、どのようなことでも

成し遂げられそうな良い時代でもあった。江戸時代も後期から末期にかけては、旧来の陋習にとらわれない町人たちを中心に、経済は成熟し、そこからうまれた進取の気性や自由な発想を基盤に、当時の知識人である侍たちが欧米から入ってくる新しい知識や学問に対して有した貪欲なまでの意気込みは、近代日本を築きあげた原動力になっており、そういう時代の風潮が秀やその父良斎の生き様を決定的に左右した、と私は考えるが、この辺りのことは当日、より詳しくお示ししたい。又、講演の中で、より具体的に申し上げるが、秀が六歳から二十歳になるまでの間、父良斎が心を砕いた学習プログラムは、現代の教育パパも顔負けの代物である。そしてオランダ語や英語を学ばせるに当たり良斎が秀に説いた学習の心得は、今日我々が外国語を学ぶ時の要諦そのものであり、英語学習の目的が高嶋秋帆塾を選んだ良斎の思惑も秀自身の言葉で聞くと、誠に周到である。維新前夜、それまで三年間みっちりと医術を伝授してくれた恩師ヴェッデルの長州行きを断り、幕府の誘いも断り、金沢行きを決めたこともしかり。時代を見る目もこの頃の知識人には備わっていたというべきであろうか。

幕末のこの時期、先を争うように欧米の新知识に群がった若者たち、今回は特に幕臣やその周辺に目を向けるが、彼らは志す道は各々異なっても、新知识の吸収のためには、時と場所を選ばず、先達を追い求め、群がったため、知友の輪は我々の想像以上に広いものがあつた。そして、これら知友の間で閥閥が形成されるといふ必然の帰結ももたらされた。当日はこの辺りについても資料で見えて頂くこととしたい。

明治維新に際し、彼ら若い幕臣たちは、その多くが官軍に刃向かう立場に立つが、明治新政府は深い知識や高い技術を身に付けたこれらの旧幕エリートたちを縛につけたままにする、もったいなさに気付き、あわただしく新政府に登用する。三宅 秀も時を同じくして東京大学校に召し出され、その後の活躍がここに始まることとなるが、講演ではその部分は概略の説明にとどめ、三浦義彰小父の示唆を受けた、生化学や鍼灸治療、鍼灸教育の面での秀の関わりについて、近年の新しい著述にも触れつつ、若干の時間を割き、紹介することとしたい。